方向

第一三二号　一九九一年六月二五日　京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内　方向社

歌人・大塚五朗（二三）

1991 6 6　原田憲雄

洛西水尾

一九三九年（つづき）　五朗、四十二歳。

『水甕』昭和十四年八月号。

触れ難くつめたきものとわが側に深々と空を仰ぐこの女（ひと）　（庭六一）

ぬかるみに道ゆづる時手触（たふ）れしが人妻ゆゑのつめたさに居り

大空に日さへ曇りて春の日のまひるを庭に散る山ざくら

胃の痛みおちつける日は庭に出て松の毛虫を焼きて殺せり

松の毛虫焼きつつわれのたのしまず五月六月胃を病みつづく

湖をめぐれる山は夏はれてさびしきまでに寄る雲もなし

夏照りのどこかに雷は鳴りてゐつ褐色の麦の穂そよぎもせぬ

日の昼を人一人ゐぬ村の家に夾竹桃の花は咲き顕（た）つ

同九月号。

水無月ぐもり

曇りつつ夕べは出づる風の中に吹かれて鳴きてはたはたが一つ　（庭二）

水無月の空の曇りは深からず翳しづかなる紫陽花のはな　（〃〃）

紫陽花の花の紫色顕（た）ちて夕べひそかにはるる梅雨ぞら

梅雨空に底明り来てかそけさやしろじろとあるどくだみの花

梅雨のあめ夕べやみしがその夜を黄ににごりたる月出でにけり　（〃三）

大なり小なり子は子の個性に生くるらし五人（いつたり）の子のたえず争ふ

泣かされて泣きてそれでも楽しくて一日のはてを子等はやすらぐ　（庭六一・続風土六五）

何といふ逞しき食慾かたのもしく時にさびしく子等を見てゐつ　（〃〃）

同十一月号。（十月号はたぶん欠詠）

旅のうた

秋と思ふ空の曇りは浅くして海洋気象台の旗ひらめきぬ　横浜　（庭五三　横浜二首）

坂の上より電車が一台降りて来ぬその坂の上の青き夜の空　（〃〃）

度の強き眼鏡にうつる街路樹は明（さや）けくも昼の風に吹かるる　文部省加藤将之氏　（庭五四）

親しめぬ歌は思はず笑ふ時皺めるまみの深き見てゐつ

小淵沢より高原鉄道にて小諸に越ゆ

まだ妻も無けむ若さのつつましく応召の兵は送られて来ぬ

山上の湖はさびしも朝に夕（よ）に風立ち騒ぐ浮く鳥もなく　（庭五五　松原湖・続風土三三五　信濃）

これの世にわれのあるさへ幽かにて霧の中なる高原（たかはら）をゆく（〃五四　八ヶ岳麓四首・〃　〃）

加藤将之は一九〇一年生れ、東大哲学科出の歌人。水甕社同人で、歌集『対象』などがあり「新風十人」のひとりで「短歌における実存主義」をとなえた。当時文部省につとめ、後に水甕の主宰となった。

同十二月号。

旅　拾　遺

寄りきてはまた離れゆく雲ありて秋の浅間のしづかなる影　（庭五六　沓掛二首・続風土三三六　信濃）

所々に雲間を洩るる日影ありて佐久の平は稲の花咲く

日に透きて霧の中なる山が見ゆその山を一人ひと降りて来ぬ　（〃五五　八ヶ岳麓四首・〃三三五　〃）

甲斐の国よ信濃に越ゆる高野原昼さへや深く日は曇りつつ　（〃五四　〃　・〃　〃）

水上と水さへ細き千曲川高き鉄橋の上よりは見つ　（〃五五　千曲川上流二首）

たそがれと晴れくる空は寒うして高原しろき夏蕎麦の花　（〃五四　八ヶ岳麓四首）

蕎麦畑の白き向かふは落葉松の小高き丘に動く夕霧

山深く流れ寄りたるこの水のさやかに川の音たてにけり　（〃五五　千曲川上流二首・〃三三五　〃）

同十五年一月号。

旅拾遺　其他

谷々に雲を寄らせて甲斐が嶺や青々と昼の空に鎮まる

秋いまだ暑き日射しを歩み来て花野の末に仰ぐ浅間嶺　（庭云　杳掛二首・続風土三五信濃）

落葉松の林を渡る山霧の時にさはだつ雨の如くに

雨あとの落葉が綺麗に掃かれゐて昼のくもりのやや冷ゆる庭　船岡山建勲神社　（庭三）

一本の松に通へる風ありてこの庭の秋はいたくひそけき　（〃〃）

よべ出でて鹿が茸をくふといふひそけき山の村に来て寐し　洛西水尾に遊ぶ　（庭三八　洛西水尾村四首）

壁に来て鳴くこほろぎもあはれにて冷顕（ひえた）つ部屋にわれ寝（いね）んとす　（〃〃水甕なし）

昨夜（よべ）は遠き谷川の音と聞きたりし今朝きけば何ぞ門川（かどかは）の音　（〃〃　〃）

稲もよく茸もよくてこの村の日射しおだしき冬にいむかふ　（〃〃　〃）

この水尾（みのお）に遊んだことは『京都風土記』の「洛西水の尾」にも記す。次に節略して紹介する。

画学生の森田曠平が、院展出品の画材を得ようと、今では一昨年の秋一週間ばかり写生に出かけたかへりがけに私の家に寄つて、一ぺん水尾村に泊まりがけで行きませんか、きつと先生の御気に入るでせうと吹聴して行つた。…それから一年たつての去年、森田曠平と二人連れ立つて水尾村に出掛けたのである。…今でこそ京都市右京区嵯峨野水尾町となつてゐるんだが、やつぱり水尾村といはなければ私なんかどうも親しめないのである。

保津川沿ひの細い道が、やがて川を離れて山の間に入る頃から、あたりは全く山の匂ひに包まれる。……丁度愛宕山の真西にあたるので、愛宕山を隔てて京の匂ひも流れ寄らず、まるで他国（よそぐに）のやうにさへ思へるのである。……嘖平が葉書を出しておいてくれたものとみえて、松尾留吉はいたく待ちわびてゐた。よい日向をもつたその家の庭には、大きな櫻の樹が黄色い葉を垂れて、その下にはハイキングや、御陵参りの人達のために赤い毛氈をかけた床几が三四台設けられていた。子供を背中に負うたお内儀さんが、

「今どしたか、うちのお父ちやん、もう来やはる頃やろとさいぜんまで待ってゐやはつたけれど。あんたにしめぢの出てゐるところ是非見せたいいうてな。」

「さうか。それでおつさんは……。」

「山見廻りに行つたところどす。……まあ先生様どすか、よくこんな田舎に来ておくれやしたなあ。何のおかまひも出来まへんけど……。ともかくお父ちやん一ぺん呼んでみますわ。」

さういつてお内儀さんは庭前に走りでて、石垣のはなに立つ、谷一つ隔てたむかふの黒黒と眉に迫る山に向つて、

「お父つちやん――。」〈と〉呼びかけるのである。……

この家の主人が帰つて来て、山へ案内しようといふ。もう峡空の大方を日も渡りおほせた事でもあり、これから山に出かけるのは、と躊躇されたのだが、

「なあにすぐそこなんですよ。おい、ちやんとお風呂の用意しておけや。」と家の中に言葉をかけながら、先に立つ主人に誘はれてそのまま後に従つた。成る程家を出ればすぐ山であつた。……

「いや、今朝見廻りに来たら折角あんたに見せようと思つてとつておいたしめじを鹿が喰ひよつてなあ。……」
鹿がきのこを喰う――。美しい話ぢやないか。……
「こんな近くまで鹿が……。」曉平も驚いたらしい。
「しよつちゆうのことでつさ。ちよいちよい姿を見かけます。」
「ああ見たいもんだなあ。」私が思はず嘆声をあげたら、主人は
「はゝゝゝゝ。」と如何にも楽しさうに笑つた。

このあとに面白い話が続くのだが割愛する。
さて十四年十月六日消印の原田宛葉書にいう。
……先日加藤将之氏上洛を機として〈水甕〉同人達の会合あり、支社活動を活発にするため歌会の幹事及び支社パンフレット編集等皆小生が引受けました。でいろいろ君の御助力を御願ひしたいと思ひます、よろしく。それでパンフレット発行の事ですが大体次のやうにしたいと思つてゐますので何卒原稿を寄せて下さい。
編集なども御暇でしたら御手助け下さい。……
「沈滞がちな支社の空気を何とかして引き立てたい」という気持と「本社からも小生宛特に依頼もあつたりして」「骨折らなければならぬ」ことになった。この月の十七日午後一時から上京区（現在は北区）船岡山の建勲神社社務所で歌会を兼ねた支社総会が開かれ、パンフレット『子子』（ぼうふら）の発行などが決まった。

玄益・玄得・玄道・蜂立甘庵―春夢女史周辺 一―

1991.6.7 原田憲雄

春夢女史の『誰が罪』は小説で、どのていど女史とその周辺の実際に合うかわからぬ。が、ともかく『誰が罪』に沿って関係資料と対照してみるのが、本稿の目的である。ここに頻用する資料と《略称》は次の通り。

《罪》 坪井すむ『誰が罪』

《中》 中野逍遥『逍遥遺稿』（岩波文庫本）

《菁》 雑誌『菁莪』若林芳樹氏提供の複写

《坪》 新宮市立図書館蔵「坪井家資料1」と同図書館調査による「坪井家資料2」

《ぶ》 「坪井蜂音庵略歴」田中利雄氏書写による

《み》 田中みどり氏示教

《女》 『女子学院五十年史及学窓回想録』（昭和三年女子学院同窓会発行）

《唐》 唐沢富太郎『図説・教育人物事典』

《人》 田口卯吉『大日本人名辞書』（講談社学術文庫本）

《森》 森銑三『明治東京逸聞史』

引用は、取意・節略・表記変更を適宜にくわえた。年齢は数え年。

坪井玄益

『誰が罪』は藤井倭文子が「十五歳ばかり」のときに始まる。坪井すむの十五歳は一八八七（明治二十）年。中野逍遥は二十一歳で第一高等中学校の生徒である。倭文子の祖父藤井玄石は、すむの祖父坪井玄益をモデルとするのであろう。玄益は一八一三年五月五日、小兵衛の次男として生まれている《坪》。新宮市立図書館が教示された『新宮市誌』（昭和十二年）によると、坪井家は代々藩医だった。小兵衛が医師かどうかはわからぬが、玄益は、一八三五（天保六）年に和歌山藩家老・新宮領主となった水野忠央に仕える医師だったろう。たぶん一八五二（嘉永五）年、四十歳になった玄益は、二十歳の大道寺蜂音庵を養子に迎えた。後にいうように、別に、生まれたばかりの赤子を玄益が養子にしていたとすれば、この年、赤子のひとり玄得は三歳、玄道は一歳である。一八五四（安政元）年、次男の仙次郎が生れた。藩との関連は蜂音庵について述べる際に詳しくしたい。一八七三（明治六）年、六十一歳の玄益は、新宮を出て下総国（千葉県）行徳駅で開業する。一八七七（同十）年、六十五歳の玄益は隠居し、家督を蜂音庵に譲った。

一八八七（同二十）年、《罪》の玄石は七十一歳だが、業が医士ですでに隠居している点、玄益と同じである。「立派な男子が二人もある」のに「何故か倭文子が母を非常に愛しこれに婿を取り後を譲」った点につき、坪井すむの長女にあたる田中みどり氏は次の話を伝える。

玄益（すむの祖父）という人は奇人。外出先から自分の羽織に包んだ赤ん坊を「それおみやげ」といって家人に手渡したとか母（すむ）から聞きました。そのまま養子として育てた子の一人は坪井玄道として、日本へ初めて体操というものを拡めた人。一人は印東姓にて東京麻布にて医者。京都にもすむが親しくしていた

縁者がいました。《み》

坪井玄道は《唐》に項目がある。印東の名が玄得であることを、弟原田禹雄が《人》で見つけた記事によって教えてくれた。「京都の縁者」が坪井仙次郎であろうことは後にわかった。仙次郎は「春夢女史小記」（『方向』第一二三号）にすでに記す。玄得から述べてゆこう。

印東玄得

インドウ　ゲントク　医師、紀州新宮の人、本姓坪井氏、のち印東氏を継ぐ。郷に在って医を学び、のち東京に出で、大学東校に入る。明治十二年卒業し、病院を建て病者を療す。門にあつまる者すこぶる多く、名、京浜の間にかしまし。かつて阿部泰造と謀り明治生命保険会社を創す。わが邦、保険医の破天荒たり。二十八年十一月廿五日歿す、年四十六。《人》

逆算すると一八五〇（嘉永三）年生れ、である。大学東校は東京大学医学部の前身。『新宮市誌』は右記事をほぼ踏襲したのち、次のように続ける。

熊児嗣ぐ。玄得はかつて岸和田中学校長たりし坪井仙次郎の兄なり。玄得、大学東校在学中、明治十一年六月新宮に帰るや、旧藩主水野家の花と唱えられし征長役の勇士の記念碑が慶応三年に鐫刻既に成るも、薩長政府を憚りて未だ建設されざるを遺憾とし、時あたかも勇士の十三回期に相当するをもって、同志と謀り、これを南谷に建設せしことは、その碑陰記に詳かなり

征長役とは、一八六六（慶応二）年、幕府が紀州藩主徳川茂承を先鋒総督に任命、六月七日開始し九月二日休

戦した、いわゆる第二次長州戦争をさす。新宮儒臣湯川鹿洞の「丙寅戦死碑記」に「この歳五月廿六日をもって〈大〉阪を発して、芸〈州〉の広嶋にゆき、進んで大野に陣す。六月十九日昧爽〈よあけ〉、賊、我が営を襲う。矢丸霰集す、…苦戦半日、賊、ついに敗走す。爾後みな捷つ。而して我が兵戦死するもの若干人」といい、その戦死者は、橋本角兵衛、野村半兵衛、松岡悌造、栗本宇兵衛、大矢友三郎、印東新十郎、中川清作、米川兼吉、宇井友右衛門、成川竹松、喜七、銀右衛門の十二人である。凱旋ののち和歌山藩では直川村に、新宮では南谷にそれぞれ十二人を葬った。新宮では幕府開成所教授柳河暾「題額」前記湯川の「記」をしるした碑を江戸で彫らせ、南谷に運び建てようとしたが、すでに明治維新となり、長賊と呼ばれた長州藩士が政府の要路にあるため、憚ってそのまま草叢に放置してあった。玄得がこれを建てたときの「碑陰記」

慶応三年、碑銘すでに成り、鐫刻（せんこく）の業また竣（おわ）る、まさに碑を紀州牟呂郡新宮南谷の口に建てんとす。故ありて遂げず年を歴（ふ）、悲痛に堪えざるなり。今茲（ことし）十三年祭期にあたるをもって、また同志の儔（たぐい）と力を戮（あわ）せて建立し、もって死者を追弔す。（原漢文）

玄得が、坪井氏を出て継いだ「印東氏」は、この時の戦死者印東新十郎の家ではなかろうか。戦死によって祭祀の断えることを憂えた藩主の意を承けて、玄益がその家に玄得を送ったもののようにも察せられる。

これまた新宮市立図書館教示の『明治生命百年史』によると、同生命保険会社は、一八八一（明治十四）年七月九日開業。「印東は慶応義塾医学所に学んだのち、東京医学校（現東京大学医学部）を卒業して内科を開業していた。名医としての評価も高く、かつ福沢の信任もあつかった」という。

玄得が慶応義塾に学んだことは《人》にも『新宮市誌』にも記さぬことだから、これを補うものである。なお弟の坪井仙次郎も慶応義塾を出てその教員だったことが注目される。

坪井玄道

坪井玄道については、唐沢富太郎『図説・教育人物事典』が、わたしの見得た文献ではもっともくわしく、他のものはこれを裏付けるていどにすぎない。だから唐沢氏の本を読んでくださいといえばよいわけだが、その本が誰でも手にしうるものでもない。だからここに要約紹介しておく。

名は「かねみち」と読む。一八五二（嘉永五）年、下総国東葛飾郡中山村鬼越（千葉県市川市鬼越一丁目）の農業坪井嘉助の次男として生れ、幼名を仁助という。一八六六（慶応二）年、医学に志し、江戸に出て両国百本杭州にあった藤堂和泉守の下屋敷に住み込み、洋学所に通い、岡保義に英語を学び一八七一（明治四）年、大学少得業生となり、大学南校（東京大学の前身）に勤務、名を光次と改め、後さらに玄道と改めた。翌年、文部省から新設の師範学校勤務を命ぜられ、アメリカ人スコットの「教授法」の通訳をつとめ　英語と算術の授業を行った。一八七四年から仙台で中学教員。一八七八（同十一）年十月、文部省は体操伝習所を設け体育教員養成に乗り出し米人医師リーランドを教師として招いたとき、玄道は通訳として呼び戻された。二年後、リーランドが帰国すると、玄道が伝習所主任教師となった。日本人で最初の体操教師である。一八八六（同十九）年、伝習所は廃止され、玄道は高等師範学校の助教諭。一八八九（同二十二）年、文科大学（東京帝国大学）で体操の授業を嘱託されている。翌年、文科大学に入った中野逍遥はあるいは玄道の授業を受けたかもしれぬ。一八九〇（同

二十三）年、高等師範学校教授兼女子高等師範学校教授。一九〇一（同三十四）年二月から一年、フランス・ドイツ・イギリスに留学した。一九〇九（同四十二）年退職、一九二二（大正十一）年十一月二日、七十一歳で死去。卓球・テニス・野球・サッカー・女子運動などを紹介し、日本の体育の草分けとなった人で、関係の著書も多い。

《唐》に坪井玄益との関りをうかがわせる記事の見あたらないのが残念だが、玄益は下総国にゆかりが深く、玄益が養子とした蜂音庵の実父の名が「玄道」であることに、ふたりの結び付きを解く鍵が秘められているようにも感ぜられる。

坪井蜂音庵

蜂音庵を「ぶあん」と読むことはさきに記した。「坪井蜂音庵略歴」は蜂音庵が「明治十九年」にみずから記したもので、漢字・片仮名まじり、句読点なしの簡単な文章である。表記をあらため節略する。〈　〉内は原田の注。表題の下に（　）して「天保七年十月十五日生」と記す。《坪》が「天保四年五月二十五日生」とするのと合わない。蜂音庵みずから記したものに従うのが順当だろうが、自記略歴そのものに矛盾があり、月日はとにかく生年は《坪》に拠り一八三三年とすべきようである。以下これに従う。京都府多喜郡篠山　大道寺玄道二男《坪》。玄道は篠山藩の医師だったのであろう。生地・幼名などもわからない。

予や不幸十歳〈一八四二年〉にして実父に後れ、十一歳にして亦た実母に後れ、祖母の為に養われて、霞ヶ関

〈東京都千代田区〉藩邸にあり。時に藩主青山〈忠良(一八〇七-六四)〉公より養育料として月々十人口米を賜う。十三〈一八四五年〉にして阿部〈櫟斎(一八〇五-七〇)?〉翁の門に入り本草学を学び、東条次郎左衛門に就きて漢四書を習う。十四にして佐藤元亮に従って漢方医学を学び、十七〈一八四九年〉にして会津藩医片倉恭斉〈斎?以下同〉の養子となり、故あり三月四日未明脱走して水戸の国〈茨城県〉に旅行す。弘道館〈水戸藩校〉に入りて一日傷寒論を講ず。該地区佐藤某に投宿する二日、添書を得て国境の医に投宿、翌日陸奥の国に入り勿来の関に至る…翌日夕岩城平〈福島県〉に着す。松井玄恭・内田龍溪は佐藤元亮に在って同門たり。よって松井宅に寄留し、また社家桜井要かたへ転居して医業を開き、生計ほとんど半年に及ぶ。時に江戸実家より帰京を促しきたる。よって暇を告げて京〈江戸〉に帰り、養家片倉に行きて正しく離縁を乞い、伊藤晋斉の門に入り更に医術を学び、漢書を荻原鳳次郎に学ぶ二年余。二十歳〈一八五二年〉当坪井氏の養子となる。二十一歳にして藩主水野土佐守〈忠央〉表医師となる。同年即ち嘉永七年卯年〈嘉永七年は一八五四年で甲寅であり「卯年」ではなく、蜂音庵自記のように天保七年生れならば、十九歳で、まだ坪井の養子にはなっていないことになる。このあたりに蜂音庵の記憶の乱れがあるようだ。当時は幕末・維新の混乱があり、陰暦から陽暦への変換があり、今ほど年表類が出回っていないから、この程度の記憶違いはあたりまえであったろう〉七月、医業をもって長崎奉行川村対馬守〈清兵衛・脩就(一七九六-一八七八)〉大阪奉行などを勤めた能吏で、その長崎奉行の期間は安政二年乙卯(一八五五)五月一日から四年丁巳(一八五七)一月二十二日までである〉に陪従、中仙道・木曾路を長崎に至り、西役所に到着す。時に英国軍艦五艘来たり交際を求む。即ち英国来港の嚆矢たり。のち立山役所に転ず。勤務の余暇、和蘭通詞志津貞之

助に就いて和蘭語を学び、また吉雄圭斉によって製薬を習い、翌安政元年〈三年の誤りか〉九月、奉行に従って江戸に帰り、藩主に命ぜられて奥医師となる。勤務中〈一八六〇（万延元）年、六月四日〉藩主故あり旧幕の命によって自国紀伊国新宮に蟄居す。嗣子大守〈水野忠幹（一八三五―一九〇三）〉立つ。時に先方の命によって新宮に行き、勤番す。〈一八六五年〉先君〈水野忠央〉逝去す。よって江戸に帰り、当主に勤番。この年、幸〈《み》によれば「香」、《坪》によれば「コウ」〉と婚姻す。時に維新、徳川氏瓦解、王政復古、諸侯各自国に帰る。江戸〈騒〉然たり。徳川叛逆によって御親征。諸藩の兵、江戸に来たる。藩主は紀州和歌山にあり。一藩新宮に転居を命ぜらる。この時、予、病床にあり。しかれども米国航前船〈？〉に乗って海路新宮に至る。即ち明治元年〈一八六八年〉四月なり。時に暴風雨波涛荒く、船体まさに覆えらんとす。……しかれども無難にして新宮領森の浦に着船。端舟をもって勝浦に渡り一泊。翌日挙家新宮に着し、蔵屋敷に仮居す。亦下船町に転ず。一ヶ年にして、父上、地を熊野地二番地に賜う。よって地を開拓し、新たに居住を築成して転移す。父上、藩主に仕う。

明治四〈一八七一〉年正月二十七日、長男春児〈しゅんじ〉を生む〈この一月四日に宮崎太郎が生れている。後にすむの夫となる〉。この年、革命〈廃藩置県〉によって予の俸給を返上す。全国医学校改革進歩〈医師免許法など〉するの際に当るをもって、大阪医校に行き、入舎して医学を蘭医「エルメレンス」氏に受くること二年、また改正して該医校閉校す〈この「医校」というのは、臨時の医師再教育講習所のようなものであったのだろう。大阪の医学校自体はその後も存続する〉。ここにおいて新宮に帰り、医業を開き、父子共にす。明治六年〈一八七三年、この一月一日から太陽暦が採用された〉五月十八日、長女澄〈《坪》では「すむ」、女史自身は「澄」

「澄子」「すむ」「すむ子」を使用〉を生む。父上、東行じて下総国〈千葉県〉行徳駅において開業。予ひとり〈新宮で〉営業して四方に奔走すること年あり。明治八〈一八七五〉年二月十五日、次男潔〈きよし〉を生む。この年、県令によって大七大区医務取締を拝命す。〈一八七七年二月、玄益隠居し、蜂音庵、家督を相続する。《坪》〉。明治十一〈一八七八〉年十二月十三日、三男隆吉〈りゅうきち〉を生む。同十三〈一八八〇〉年三月十五日四男四郎を生む、同年五月五日病死す。同十四〈一八八一〉年九月二女ツギを生む。同十五〈一八八二〉年三月、東京に来たり、下総国船橋九日市字一丁目に移転す。四月八日、澄、桜井女学校に入舎す。六月十七日二女ツギ死す。十七〈一八八四〉年七月一日、同市二丁目七十七番地へ宅地を購求して移転す。これより先、長男春児六歳にして東京へ同行、父上に依托す。春児、姉あり、分娩直ちに死す。明治十九〈一八八六〉年記す

坪井蜂音庵

以上である。九月二十一日に生れた五男泰治（たいじ）のことに触れぬところから察すれば、この履歴の執筆は一八八六年の春ごろまでであろう。すむが桜井女学校に入学した一八八二年、玄益七十、蜂音庵五十、春児十二、すむ十、潔八、隆吉五、ツギ二歳であった。その翌年の八月、中野逍遥が宇和島から東上し、神田駿河台の成立学舎で学び、翌年夏、大学予備門（第一高等中学校の前身）に入学する。

蜂音庵一家の移転や桜井女学校での生活については『女子学院五十年史及学窓回想記』によせた宮崎澄子（かつての坪井すむ）の文章「学窓の回想記」が語っている。次号はこれを紹介しよう。

草ぶきの小屋 —法華経巡礼 61— 1991 6 2 原田憲雄

4-8. さて、世尊よ、息子への渇愛に苦しむこの人は、それこそ時をおかず、足の速い人たちをやって「さあ、きみたち、あの男をすぐ連れてきなさい」と。さて、世尊よ、その人たちはみな、急いで追いかけ、あの貧しい男をつかまえます。すると、世尊よ、貧しい男はそのとき、恐れ、おののき、おびえ、身震いし、おぞけだち、尻込みしては、ためらい、はげしく悲鳴をあげ、叫び声を放って、泣き喚き「わたしは、あんたらに、何も咎められることはしていない」というのです。ところが人たちは力ずくで、泣き喚く貧しい男を連れてきます。貧しい男は、恐れ、おののき、おびえ、尻込みしてこう思います——殺されたり、鞭うたれたりしたくない、だが、そうなりそうだ——　かれは気絶し、地に倒れ、意識を失います。かれの父は近づき、人たちにいうのです「きみたち、男を連れてくるのに、そんなに無理やりにするものではない」と。そうして男に冷たい水を注ぎ、もはや話しかけないのです。なぜなら長者は、貧しい男の望みが貧弱であることを知り、また自分がかれには厳めしすぎること、しかしかれが自分の息子であることもわかっているからです。

atha khalu bhagavan sa puruṣaḥ putra-tṛṣṇā-sampīḍitas tasmin kṣaṇa-lava-muhūrte javanān puruṣān sampreṣayet / gacchata mārṣā etaṃ puruṣaṃ śīghram ānayadhvam / atha khalu bhagavaṃs te puruṣāḥ sarva eva javena pradhāvitās(w:pradhāvitvā) taṃ daridra-puruṣam adhyālambeyuḥ / atha kha-

lu bhagavan sa daridra-puruṣas tasyāṃ velāyāṃ bhītas trastaḥ saṃvignaḥ saṃhṛṣṭa-roma-kūpa-jāta-a udvigna-mānaso dāruṇam ārta-svaraṃ muñced āraved viravet / nāhaṃ yuṣmākaṃ kiṃ-cid aparādhyāmi iti (aparādhyāmīti) vācaṃ bhāṣet / atha khalu te puruṣā balātkāreṇa taṃ daridra-puruṣaṃ vir-avantam apy ākarṣeyuḥ / atha khalu sa daridra-puruṣo bhītas trastaḥ saṃvigna udvigna-mānasa e-vaṃ ca cintayet / mā tāvad ahaṃ vadhyo daṇḍyo bhaveyaṃ (W: /) naśyāmīti / (W:) sa mūrc-chito dharaṇyāṃ prapated visaṃjñaś ca syāt / āsanne cāsya sa pitā bhavet / sa tān puruṣān evaṃ vadet / mā bhavanta etaṃ (W:evaṃ) puruṣam ānayantv 'ti tam enaṃ (W:evaṃ) śītalena vāriṇā parisiñ-citvā na bhūya ārapet / tat kasya hetoḥ / jānāti sa gṛha-patis tasya daridra-puruṣasya hīnādh-imuktikatām ātmanaś codāra-athāmatāṃ jānīte ca mamaiṣa putra iti //

4-8. さて、世尊よ、その長者は、巧みな方便によって、誰にも、これが息子だ、とは語りません。さて、世尊よ、この長者は、他の男にいいます「ああ、あんた、さあ行って、あの貧しい男に言いなさい、『おい、お前さん、あんたは好きな処へ行くがいい、自由になったんだ』と」。こういうと、その男は言われたとおり、貧しい男に近づき、近づいてから貧しい男にこう言います。「おい、お前さん、あんたは好きな処へ行くがいい、自由になったんだ」と。さて、その貧しい男は、この言葉を聞いて、ありようもない、不思議な思いがするでしょう。かれはそのいた場所から立ち上がり、貧しい巷に行くのです、食べ物や着物を手に入れるために。

atha khalu bhagavan sa gṛha-patir upāya-kauśalyena na kasyacid ācakṣen mamaiṣa putra iti/ atha khalu bhagavan sa gṛha-patir anyataraṃ puruṣam āmantrayet/ gaccha tvaṃ bhoḥ puruṣa / enaṃ daridra-puruṣam evaṃ vadasva / gaccha tvaṃ bhoḥ puruṣa yen'ākāṅkṣasi mukto'si / evaṃ vadati sa puruṣas tasmai pratiśrutya yena sa daridra-puruṣas tenopasaṃkrāmed upasaṃkramya taṃ daridra-puruṣam evaṃ vadet / gaccha tvaṃ bhoḥ puruṣa yen'ākāṅkṣasi mukto'sti / atha khalu sa daridra-puruṣa idaṃ vacanaṃ śrutv'āścaryādbhuta-prāpto bhavet / sa utthāya tasmāt pṛthivi-pradeśād yena daridra-vīthī tenopasaṃkrāmed āhāra-cīvara-paryeṣṭi-hetoḥ /

4-10. さて、その長者は、あの貧しい男を引き寄せるために、巧みな方便を使います。かれはそこで顔色の悪い体のみすぼらしい二人の男を使います「あんたらは二人で、さっきここにいた男の処へ行って、二倍の日給をやると、あんたらの言葉で雇い、わたしの屋敷で仕事をさせるがいい。その男が、どんな仕事をするのかと聞いたら、あんたらは『おれたち二人と一緒に汲み取りをするのだ』というのだ」

atha khalu sa gṛha-patis tasya daridra-puruṣasy'ākarṣaṇa-hetor upāya kauśalyaṃ prayojayet / sa tatra dvau puruṣau prayojayed durvarṇāv alpaujaskau / gacchataṃ bhavantau yo sau puruṣa ih'āgato'bhūt / taṃ yuvāṃ dvi-guṇayā divasa -mudray'ātma-vacanenaiva bharayitveha mama niveśane karma kārāpayetham / sacet sa evaṃ vadet kiṃ karma kartavyam iti sa yuvābhyām evaṃ vaktavyaḥ saṃkara dhānaṃ śodhayitavyaṃ sah'āvābhyām iti /

4-11. そこで二人の男は、貧しい男を捜し、その仕事をさせます。二人と貧しい男とは、富豪から賃金をもらい、その屋敷で汲み取りをします。かれらは富豪の家に近い藁ぶき小屋を宿とするのです。あの長者はまた、窓や風穴から、汲み取りをしている自分の息子を見て、あるべくもない不思議なことと思います。

atha khalu tau dvau puruṣau sa ca daridra-puruṣo vetanaṃ gṛhītvā tasya mahā-dhanasya puruṣasy-āntikāt tasminn eva niveśane saṃkāra-dhānaṃ śodhayeyuḥ / tasyaiva ca mahā-dhanasya puruṣasya gṛha-parisare kaṭapali-kuṭīkāyaṃ vāsaṃ kalpayeyuḥ / sa c ādhyaḥ puruṣo gavākṣa-vātāyunena taṃ svakaṃ putraṃ paśyet saṃkāra-dhānaṃ śodhayamānam / dṛṣṭvā ca punar āścarya-prāpto bhavet ||

すだれ

1991 6 13　原田慶

梅雨の季節、すっきりしない天気の中で、庭の草木の茂るにまかせて、梅雨明けを待つ間がおもしろい。地にはツユクサ、タデ、ドクダミ、カタバミ、オオバコ、その他、春に小さな花を咲かせた草が、少し艶を失ってばさばさした葉を広げている。草に埋もれてアマリリスが咲き、ムラサキツユクサは倒れながら美しい紫をふりまいている。キョウチクトウは、細いすべすべの葉と、ピンクの花を塀の外にまで降らせるので、駐車している車のフロントガラスにもいっぱい積もる。ビワは色づき、アジサイの花が、今年は少し小さい。クチナシの花の香

の中に虫がもぐっていて、糞をぽろぽろと落とす。のぞいてみても虫はなかなかみつからない。糞は雨水を吸ってだんだんふくらんでくる。

植えてから十年ほどにもなるハナザクロが、やっと花をつけた。赤い花がたくさんついて、枝がしなっている。近くへ行ってみると、まるで手品師のポケットから出てきたばかりのハンカチのように、くしゃくしゃに畳みこまれた紅絹が、そのままでぽっとふくらんでいる。

寺の屋根より高くなって、陽をさえぎってくれたクルミの木が、昨年、秋の台風で倒れたので、今年の夏はさぞ暑いだろうと覚悟している。梅雨の晴れ間に三十三度まで気温の上がる日があって、どんな夏になるのだろうかと思う。クルミの切り株には、四月の終り頃、たくさんの新芽が吹き出した。どの枝を仕立てて伸ばせばよいものか、わたしならどの芽もみんな伸ばしたいところだが、主人は傾いた株の上側からまっすぐ立ち上がった芽をえらんだ。下から横から、われもわれもと頭を出す芽をみんな欠いて、上のものを一本だけ残したので、それはぐんぐんと元気に伸びている。この枝が陽をさえぎってくれるとしても、まだ数年は先のことだから、今年は窓に葭の簾を掛けた。裾が風にはたかれないように、紐をつけて窓の下へ引いておく。窓との間が四十センチくらい離れているので、少しの風にもゆれる。簾を透してみる風景は、織り出された模様のように静かである。

昔は本堂のまわりの廊下の外にも簾を吊るしたものだと主人がいう。そう言えば三十年ほど前には、寺の母が部屋の襖をみんな外して竹の簾を掛け、葭簀の衝立を置いて夏の用意をした。その簾はふちの金襴がすり切れて古びたので掛けなくなり、わたしはそれを広げてドクダミを乾燥させるのに使っていた。もうすっかり傷んでし

まったが、あのような簾は今、何枚も買えるような値段ではないようである。神社には必ず掛けてあるものだが、わたしに最も印象的なのは、上賀茂神社の御簾である。すぐ近くまで行って拝することができ、ふちの金襴が朱色でとても若々しい感じが意外だった。青い金襴の使われている神社もあるが、うちで使っていたのは灰緑の金襴だったように思う。御簾は古くから、汚穢（けがらい）をさえぎる物として使われてきたから、神社では神域を参拝者からさえぎっているのだと思う。俳句の夏の季題、青簾（あおすだれ）は、宮中で四月一日に更衣の御殿の翠簾を掛けかえたことによると、古い歳時記に書かれている。源氏物語事典によれば、平安貴族の生活の中では、御簾や几帳を使うことによって建築の開放性が象徴され、ゆらゆらやひらひらによる開放性が、かいま見（覗見）を可能にし、簾の中に女性がいて神や人を待つという深層があるとも考えられる。女車に下簾の必要なのも、簾の効用を同じくする。というようなことが書かれていておもしろい。王維の詩にも簾があったことを思い出して『中国詩人選・6　王維』を見たら次のようなのがあった。扶南曲（天竺楽）の歌詞として作られたもの。

香気は空に伝つて満ち　　香気は空につたわっていっぱい。
粧華は箔に影して通る　　お化粧をした人たちの影がすだれを通して花のよう。
歌は聞ゆ　天杖の外　　歌声は近衛兵の立つ外にも聞こえ、
舞は出づ　御樓の中　　舞いは楼台にくり出しました。

簾を透してみえる中の気配はおぼろではっきりしないから、想像で、より美しく楽しそうに感じられる。中に

いる人も外から見ている人の気持の分まで楽しんでいる。そういうことは誰もがいつか経験しているような気がするが、簾というものは、雰囲気をつくるのに大変ふさわしい道具だった。雑誌『太陽・No. 88』に幸田文さんの「ゆうだち」という話が出ている。

…そういう小家では、夏は建具を外し箪笥の位置をかえ、軒に目かくしのすだれをかけたりして、夏を涼しげにする。…すだれのかげにいると、誰でも実際よりはちっとばかりよく見える。紫と白の、くっきりした透綾（すきや）の矢絣（やがすり）を着た人が、お扇子をつかっているのなどが透ければ、このひとこんなにきれいだったかとおもう。…白絣の青年もまたいい。どうも、すだれ透く影というものは、恋めかした情感がただよう。

このような話は、今では落語の世界のように思えて、三味線でも聞こえてきそうに感じるが、何十年か以前には、わが家の主人でも白絣や紺絣を着て書生のようなかっこうをしていた。今は作務衣や甚平、ポロシャツなどを着ていて、頼んでも紺絣や白絣は着てくれそうにない。

自分で簾を掛けてみると、町の家々のことも気になる。古い二階屋の手摺や窓の外に、長い簾が掛かっている。あたりまえだが、東西に窓や戸のある家に多く、南北に向いている家にはあまり簾は見られない。細い通りには玄関の戸を開けっ放しにしておくために、その前に掛けている家もある。

わたしの居る部屋の窓は西に向かって開いていて、外は墓地だから西陽をさえぎるものがない。簾を掛けて外を見ていると少し遠くにハナザクロが揺れている。その後はブロック塀で、道を通る人は見えない。塀の外は道

を隔てて二階家が並んでいるが、どの二階にもあまり人影を見ない。長い簾を掛けて朝日をよけている家は、その部屋が寝室になつているらしい。俳句歳時記を見ていたら、この部屋からの眺めにぴったりの句にであった。

二つ吊りし簾の透間花柘榴　　虚子

古簾西日をよけて用をなす　　〃

それではわたしも一句、

「くちなしの花咲きにけり妙見堂、これでどうでしょうか」

「そんな、妙見堂とくちなしと何の関係もあらへんがな」

主人はいっぺんに興醒めしたような顔になる。まじめに期待されても困るが、これでも少しは考えたのになあと思う。

「くちなしの花が咲いていて、その奥に妙見堂があるんですよ」

「そう言えば、今年は妙見さんの前のクチナシが、ほんとにたくさん花をつけてるなあ」

「では、中でかさこそ音がするなり、と付けたらどうでしょう」

もう何も言わずに気が抜けたように笑っている。このお堂の中で、主人はいつも印刷をする。

「くちなしにはスカシバの幼虫がいて、毎日取るんですが、次々とついて、小指くらいの大きさになったみどりの虫が、花まで食べるんですよ。大きな糞をころころ落すし、この季節は毛虫なんかもたくさん殺すから、何となく気分がよくないですね」

簾の中でするような粋な話でもないので、主人は立って行ってしまった。その後、何とか一句よいのができないものかと考えていたがむつかしい。

簾を垂れてなほ淋しさや山見ゆる　　前田普羅

ここから山は見えないが、ひとの句を借りて簾を眺めている。近くへ寄って透して見ると、今日は晴れて、空に白い雲が浮かんでいた。昨夕はバタバタと簾をはためかして突然に降った。ただでさえうっとうしい梅雨に、雲仙岳のふもとの島原では火砕流と雨に苦しめられている。現地の人達はどんなにつらいだろうと思って、食事をするのさえ申し訳ないような気になる。

自然の力を越えることなどできるはずがないのだから、いつも気持よく居ようなどと工作すると、いよいよ困ることになる。杉本秀太郎氏が『洛中生息』に書いておられる。

もともと京都人の夏涼の法は、霊の信仰行事に托した遊楽によって暑さを忘れる法か、さもなければ、一種の見立ての方式にもとづいているのだ。涼しそうだということは即ち涼しいということだとかんがえる。

…すだれ葭戸に網代も、涼しいという見立ての式を信じていなければ、所詮は効用なきにひとしい。

多くの家庭がクーラーを使って、電力の消費量が最高になる日のために、原子力発電が必要なのだという。自動車の排気ガスなど夏の空気を息苦しいほどにする原因がいろいろあるから、クーラーを使わずにいられない。自然がほんとうの自然でないから、見立ての方式も成り立たなくなっているのだと思う。自然がもとの自然をとりもどす方法は、もうないのだろうか。